

浄土

1985-5

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運轉省(特別授承認雜誌)第三二五号
昭和六十年四月二十五日印刷 昭和六十年五月一日発行
第五十一卷 五月号



乙丑
五月
丁未

治

五月の秀句

方丈に今とどきたる新茶かな

高浜 虚子

ちる花のありてほとほと新樹たり

山口 誓子

えにしだの黄にむせびたる五月かな

久保田万太郎



五月号



仏の眼（まなこ）は四大海水の如し。青白分明なり。

——『観無量寿經』真身観文

目次

法 話

- 日々新たなり……………近 藤 徹 称……(2)
- 心のはなし(上)
- 心のしくみと広がり……………金 子 寛 哉……(8)

み仏とともに = 2 =

——三ツ谷村の念仏信仰——……………安 居 香 山 ……(20)

《世相のスケッチ》

- 転勤……………合 島 近……(14)

河西回廊の秋

- 「五大石窟の旅」旅日記(二)……………木 下 隆 一……(28)

＜読者のページ＞

- 遙かなるビルマ戦没者慰霊の旅……………奥 山 清 賢……(25)

◇◇長篇連載小説◇◇

- 立ち止まるな善導 第11回 ……………寺 内 大 吉……(35)
- 江南の残月 (二)
- 挿絵 松濤 達文

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

日々新たななり

知恩院主催の月例会に「おてつき文化講座」というのがある。先日、その講師をたのまれて、会場の山一証券ホールへでかけた。控室へ入ると、そこにひとりの男のひとが待っておられて、いきなり「わたしが誰だかわかりますか」と問いかけられた。はたと困った。どうしても思いだせない。名刺を差出されてやっと思いだした。朝日新聞の鳥越さん



近藤徹称

(浄土宗尼僧道場長)

である。もう四十年近くもお目にかかっていないのだから、むりもない。今は朝日カルチャーセンターの非常勤顧問をしておられる。わたしがまだ尼衆学校の生徒だったころかあるいは卒業してその学校のおてつだいをしていたところか、はっきりおぼえていないが、鳥越さんは尼衆学校へよく出入りをしておられた。直接お話をしたことはなかったが、姿

はしばしばお見うけした。

その鳥越さんが足利紫山老師を知っているといわれる。紫山老師はわたしの母の叔父にあたる人で、浜松の方広寺で、管長として昭和三十四年、百一歳でなくなった。その紫山老師が生前、京都へこられると、鳥越さんが駅まで車で迎えにいった、大徳寺の高桐院まで送っていかれたのだそうである。高桐院の御住職だった上田義山師が紫山老師の内弟子の一人だったからであろう。

わたしの母は紫山老師よりも先になくなった。母がいなくなつてからは老師がわたしの生家に立ちよられることもなくなった。その代りに、お弟子の河野宗寛老師が紫山老師にお目にかかれる機会をたびたびわたしのためにもうけて下さった。わたしが初めて紫山老師におあいしたのは、子供のころであるが、老師はそのころすでに六十歳をすぎておられたわけで、わたしにとっては老師は初めからおじいさんであった。そのせいか、その後い

つお目もししても年をとられたという気がしなかった。

紫山老師には、大法輪から出された『臨濟録提唱』と、『紫山老師遺芳録』という本がある。遺芳録は、老師の三回忌に出版されたもので、百六十余人の方々が執筆しておられる。

そのなかには、老師九十七歳、徳富蘇峯翁九十三歳という昭和三十年のとてもいい写真がのっており、親しい間柄であったことが偲ばれる。徳富翁は老師のことを「六合の一閑人」と評しておられたそうだが、その徳富翁も戦後の追放が精神的によほどこたえたものか、老師が贈られた詩に対して、「この詩の結句を見て、塵烟はすっきりと掃絶し、心機一変して日日新たな生活ができるようになった」といって礼状をよこされたそうである。その詩は、

一鉢一衣雲水身 風餐露宿幾秋春

看来老衲多余矣 掃絶塵烟日日新

というのである。「雲水の身である自分は、一鉢一衣という身軽さで野宿しながら何年もすごしてきた。老僧にはまだまだ楽しみが沢山ある。塵烟を掃絶しているから日日が新しい」とでもいうのであろうか。「塵烟を掃絶せよ」という句は徳富翁を力づけ励ますための句であつたであらう。老師御自身の境涯を示す墨跡には、結句を「山色溪声日日新」と書き改めておられる。

墨跡ということから思いだしたことがある。

先年、わたしの知人のアンというアメリカ人がパークレーから京都へきて、「友人があなたにぜひ見せたいものをもっている」ということだったので、自坊へきていただいた。アンの友人というひとは日本の美術に関心が深く、あれこれ買い集めているという話で、「今日はいいいものが手に入ったので見てほし

い、ちょっと高価だったけど」といわれる。見せていただいて驚いた。紫山老師百歳の「夢」の軸ものであつた。わたしが、この字を書いたひとを知っているというと、相手はわたし以上に驚いて、考えられない。何という奇遇とおおよろこび。

老師は晩年、日課の一つとして毎日筆をとられたようで、その墨跡はずいぶん数にのぼることであらう。それにしてもたまたま訪れたアメリカ人が、老師の墨跡を買って、誰の書かも知らないで、わざわざわたしに見せにくるとは。

その後、大学の図書館がその墨跡を買いあげたので老師の略歴を教えてほしいという通知があつた。それと同時に、ニューヨークで出版された茶の湯の雑誌の中に老師の「茶」の字を見いだしたからということ、その雑誌が送られてきた。

書がアメリカやヨーロッパで関心をよんでいるということは知っていたが、紫山老師の

書がこのような形で海外に流れていようとは全く驚きであった。

鳥越さんと話しているうちに、わたしは法山尼のことを思いだした。鳥越さんが出入りされたころの尼衆学校は五年制で、一学級に十人前後の生徒があり、通学のひとを除いても三十人ほどのひとが寄宿で生活を共にしていた。ほとんどのひとが、子供のころに尼寺の養女になり、寺の子弟として入学してこられたひとたちであった。

その中にひとり真言宗の寺の娘で法山さんというひとがあった。法山さんは、お父さんの生きかたが僧侶としてなまぬるいからという理由で、みづから尼僧になり、お父さんとどちらがほんとうに法に生きるか競争しようといって寺を出てきたというひとであった。

旧制女学校を出たばかりの若さで、他人のためにつくそうという純粹な熱意にあふれたひとであった。ほかの生徒さんがみなおとなしかったので、法山さんの情熱的な積極的な生

きかたが、よけい目立ったのかも知れない。わたしは、女の中にはこういう奇特なひともあるのかと感心し、とくに親しくつきあったことをおぼえている。

その後あるいきさつがあって、一年か二年在学されたあと、急に御両親のもとへ帰ってしまった。御両親はこの日を待っていましたとばかり、すぐに娘を江戸川の善養寺へお嫁に出された。

数年後、名取薫子という名で、法山さんから手紙がきた。そこには上京の折にぜひ寄ってほしいという意味のことが書いてあった。

なつかしく思っただけで東京へいったついでに立ち寄ると、荒れはてた寺の内から迎えて出てきてくださった薫子さんは、以前と変らないファイトに燃えた調子で、「ごらんの通り荒れはてていて手がつけられないんです。まづこの寺を建てかえなければ。お嫁にきたからには仕方がないわね」と明るく笑っておられた。環境は変わってしまったても、法山さんは

相変らず法山さんだなど、その意気込みに感心もし、同時に安心もした。

その後、数回お邪魔する機会にめぐまれたが、ゆくたびに新しく本堂が建ち、広いおざしきができ、庭には池がしつらえられ、以前のおもかげはどこへやら、全くみちがえるばかり立派になった。

姪ごさんの話によると、「とにかく叔母は、たれかれの差別なしに、他人に施すことが好きで、自分が不自由していても、物があるとさっさと他人にあげてしまうのです。だから近所のひともほっておけなくて、いつのまにか草とりや掃除の手伝いにこられるようになって、お寺はいつもきれいに保たれるようになりました。善養寺が今日あるのは、ひとえに叔母のおかげです。叔母の努力のたまものです。叔母がお嫁にこられなかったら、善養寺はここまではなかったと思います。ある日わたしが突然友だちをつれていったことがあるのです。そのときも初対面の

その友だちに、せっかく京都からこられたのだから、ぜひとまっていきなさい、といって旧知のひとのように親身にされるので、つい二人でとまってきました」ということであつた。

今年の二月、その姪ごさんから、けさ善養寺の叔母がなくなりましたと電話があつた。わたしは耳を疑つて、善養寺の御住職がですかと思わず聞きかえした。

御住職は、数年まえ入院されて、薫子さんからたいへんだったという話を聞いていたので、再入院でもなさっていたのかと錯覚したのである。が、よく聞いてみると、薫子さんはがんにかかっておられたようで、御住職の入院さわぎに氣をとられて、自分のがんに氣づかれるのがおくれたようである。病氣に氣づいて入院されたときにはすでに手おくれで、その後は病院へ入ったり寺へ帰ったりのくりかえしをされたが、その間にもがんは進行して、ついになくなったということであつ

た。さいごのさいごまで、ひとのためにつくしてこられた薫子さんらしい、いさぎよい最期であった。

薫子さんの実家の御両親は健在だそうで、子供に先だたれて、どんな思いをしておられるだろうと思うと言葉につまるが、しかし薫子さん自身は、短期間の間になすべきことをすべてなし終えて、思い残すことは何もなかったのではないかと思われる。三人の子供さんはそれぞれ結婚して、すべてうまくいっているし、長男さんは副住職として活躍しておられる。そのあととりの子供さんもすでにある。欲をいえば、これからは京都へゆっくり出てこられる条件がそろったのといえる。

しかしそんなことよりも何よりも、とにかく尼衆学校にとびこんでこられたときの意気込みを生涯もちづけて、法のため、他人のために身を粉にしてつくしてこられた薫子さんの一生はほんとうに見あげたものだと思うし、頭がさがる。

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6 変型判 / 定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6 判 / 七二頁 / 定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

——多数量行——

大道社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―一六

電話(〇三三六二)五九四四

振替(東京)一八三四七

心のはなし(上)

||心のしくみと広がり||



かね
金子
かん
寛
さい
哉

(大正大学講師)

日本の古い諺に「桃栗三年柿八年」という言葉がある。これは種から芽が出て木となりその木が成長して実をつけるまでの年月を語呂よく言ったものである。桃と栗は三年、柿は八年目にしてようやく実がなりだすと言う意味である。これと良く似た言葉が古くから仏教を学ぶ者の間にも伝え

られている。「唯識三年、俱舎八年」という言葉である。仏教学の基本として「唯識学」や「俱舎学」を学ばねばならないが、それを一通り学ぶには「俱舎学」を八年、そしてその上尚かつ「唯識学」を三年程学ばなければならない。さもないれば、いっばしの仏教学者にはなれないと言う意

味である。

この二つの諺は語呂が非常に良く似ていることから考えて、互いに影響し合つて出来た言葉ではないかとも思われるが、どちらが先かは定かではない。それは兎も角、この両者は語呂は同じでも、その意味する所と解釈する語順は、今見たように少し異なるようである。

この仏教学の基礎といわれる「俱舎学」とは『俱舎論』という仏典を学ぶのであるが、この中には「五位七十五法」という教学体系が説かれ、又『成唯識論』には更に「五位百法」が説かれている。五位とは全ての存在（一切諸法）を五種類に分けると言う意味であつて、(一)物質的なものを「色法」(十二)、(二)心の主体となる識を「心法」(二)、(三)心のはたらきを「心所法」(四十六)、といひ、四色法でも心法でも心所法でも無為法でもないものの、たとえば生・住・異・滅というようない存在のあり方のようなものを「心不相応行法」

(十四)、又(四)生滅変化することもなく、因縁によつて作られることもなく、更にそれ自体がはたらきを起すこともないものを「無為法」とするのである。『成唯識論』ではこの分類を、(一)「心王」(八)、(二)「心所法」(五十二)、(三)「色法」(十二)、(四)「不相応行法」(二十四)、(五)「無為法」(六)の百法としている。

「俱舎」「唯識」の「七十五法」と「百法」の相違は別として、今ここで述べたいのは仏教の学問体系の中にしめる「心」の項目がいかに多いかと言うことである。『俱舎論』では七十五法の中、「心法」と「心所法」をあわせて四十七法、『成唯識論』では百法中五十九法を数え、いずれもその全体の半数以上が「心」の項目でしめられているのである。中でも『成唯識論』では、「すべての存在はみな識(心)が變じて現われたものである」とするのであるから、仏教の学問は「心」と、その「心のはたらき」を中心に探究されてきた学問であるといつてもいいすぎではない。

以上見たように仏教学の中心テーマは「心」で

ある。その「心」の内容について『成唯識論』を中心に今少し立ち入って考えて見たいと思う。

「心王」は心のはたらきの主体となる識のことをいい、この「心王」に伴ってはたらく従属的な心の作用を「心所」(心所有法)というのである。

「心王」は対象の全体、即ち「総相」をとらえ、

「心所」は対象の全体及び部分、即ち「別相」に對してはたらくのである。この「心王」と「心

所」は必ず同時にはたらくのであるが、この両者は非即非離(一つのものではないがだからといって全然別のものではない)の關係にあるとされている。

更にこの「心王」の内容を詳しく見ると八識から成り立っている。即ち、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・末那識・阿頼耶識の八つである。この中最初の六つは、我々が普通「からだ」と「心」という場合の身体的な器管(眼・耳・鼻・舌・身)と、精神的なはたらき(意、この六つを前六識という)を示している。しかし、最後の「末那識」と「阿頼耶識」の二つはあまり見られない言葉である。この二つの識を考えるのが、仏教特有

の「心」の考え方であるとも見得る。少し煩雑になるが、仏教における「心」の中心点でもあるので、その概略を述べて見たいと思う。

末那というのは梵語(インドの古い言葉)のマナス *manas* という語を漢字の音を以て表記した音写語であって、中国では「意」と訳し、その意味は「おもひはかること」(思量)を本質とする「識」である。前から数えて第七番目に位置するので第七識ともいい、この識は我癡(無明)・我見(我執)・我慢(我慢)による心の高ぶり・我愛(我貪著する)という四つの根本的な煩惱と共に起る(相應し)、我執の根本となるので、汚れた(染汚)意というのである。しかもこの識は、無始よりこのかた人間の心の中に微細に相統し、力を用いなくても自然に起る。又その性質は、善でも不善でもないが、心を清浄にする為の修行者の心を惑わす(有覆無記)はたらきをもっているのだ、仏道修行の上では、克服されるべき対象となるものである。

「心王」の最後の識である「阿頼耶識」は梵語

アーラヤ alaya の音字語である。中国では「無
没識^{ぶつしき}」とか「藏識^{ざうしき}」と訳し、第八識ともいっている。「無没識」というのは諸法をしつかりとらえ
(執持^{しやくぢ}して失わないという意味であり、「藏識」
というのは諸法が展開して行く為の依り処となる
根本的な心という意味である。また、全てのもの
が発生する種子^{しゆじ}を所藏するということで「種子
識」ともいっている。この阿頼耶識を清浄な真識^{しんじき}
と考えるか、或は汚れた妄識^{まうしき}と考えるかと言う点
では早くから論争が行なわれている。

阿頼耶識を真識と考える説では、心王の究極は
第八阿頼耶識であつて、それは本来清浄なもので
あるとするのである。しかし、この第八識を汚れ
た妄識であるとする説では、更に第九「阿摩羅
識^{あまろしき}」を考え、この第九識こそけがれない(無垢)
識、即ち真如識・淨識であるとする。

このように心王の内容について、上に述べたよ
うな両説が見られるのであるが、心の本体である
「心そのもの」を、究極的には、何の汚れもない
無垢清浄なものであるとする点では一致するので

ある。

このような無垢清浄を本体とする「心王」に付
随してはたらく「心所法」について見ると、次の
ようになる。

『成唯識論』では、「心所」を(一)「遍行^{へんぎやう}」(五)、
(二)「別境^{べつぎやう}」(五、この(一)(二)は全ての心と相応する)、
(三)「善」(十一、全ての善心とのみ相応する)、(四)「煩
悩」(六、全ての染汚心、即ち不善心と有覆無記心とに
共通して相応する)、(五)「随煩惱」(二十)、(六)「不
定^{じやう}」(四、上の五類以外のもの)の六種に大別してい
る。本来ならばこれらの各心所の名目を一々列挙
して、心王との係わりを述べるべきではあるが、
あまりにも煩雑になるので今は省略し、ただ人間
の心の中で最も良く取り沙汰される(四)(五)の「煩
悩」の項目のみを、更に詳しく述べて見たいと思
う。

(四)煩惱：貪・瞋・癡・慢・疑・惡見

(五)随煩惱：忿・恨・覆・惱・嫉・慳・誑・諂・害・憍・無慚・無愧・悼・慙・慙・不信

・懈怠・放逸・失念・散乱・不正知

これらの中、(四)の六つを根本煩惱といい、(四)の二十を枝末煩惱といって、煩惱の性格づけをしている。(四)はもろもろの煩惱の根本となるもので、煩惱の本体そのものであり、(四)は(四)の根本煩惱に伴って起る従属的な煩惱である。

この従属的な枝末煩惱を更に三種に分け、(a)初の十は各々別々に起るので小随煩惱(小随惑)、(b)次の二つ、即ち無慚と無愧は一切の不善心にあまねく起るので中随煩惱(中随惑)、(c)最後の八は一切の不善心と有覆無記心とにあまねく起るので大随煩惱(大随惑)という。このように、一口に「煩惱」といっても、その煩惱を起す心の要素は以上に見たように異なる訳である。

仏教学ではこれらの各項目について更に細かく検討し、その教説を展開するのであるが、今はそれを知るのが目的ではない。仏教では「心」というものをどのように考えているのか、ということの概略が理解出来れば良い訳である。

このような仏教の心識説は、釈尊の教えに帰依した多くの信奉者達が、悟りを得るべく修行し、その修行の過程で人間の心、しかも修行者が、修行者自身の心を深く省察し、その省察した結果を長い間積み重ねて出来て来たものではなからうか。勿論、それが今見て来たような整然とした形に組織化されたのは仏教が次第に展開され、部派仏教といわれる非常に思弁的な時期を経過して以降のことであるのはいう迄もない。

以上見て来たような仏教の心識説が形成されて来た陰には、「人間の心」というものに対して多くの仏教徒がいかに真剣に取り組んで来たかという事を考えざるを得ない。釈尊の得たような悟りを得るには「心の迷い」を断ち切らねばならない。それにはどうしたら良いか。迷いとは何かということをつきとめることが必要となる。その迷いのものとは何か。それをさがし出して断ち切れば良いのではないか。このような探究から先に見たような心のしくみを考え、しかもその中に根本煩惱、枝末煩惱等の項目を数えるようになったので

はなからうか。仏教の修道体系も多くの場合このような「心」を惑わす煩惱を取り除き、本来清浄な心を体得すべく組織されているように思われる。その「無垢清浄心」を体得した者が悟りを得た人といわれ、また釈尊の教えの真髓に触れ得たことになるのではなからうか。更にいえばそれは「仏心」にも通ずるものであらう。

このような「心」への取り組みが中国仏教では次第に行の体系の中に取り込まれ、心のしくみそのものの理解よりは、その「心そのもの」をどのようにすれば体験し、また体得出来るかという方向に中心が移されて行ったように思う。「一心」「観心」「法界心」「客塵煩惱」等の言葉そのような傾向を示しているのではなからうか。勿論その基本には前述した「心のしくみ」が前提とされていることはいうまでもない。

ところでここでは、「心」に対する考え方を知る手だてとして漢字のことに少し触れて見たいと

思う。「心」そのものをどのように考えるのかということは別として、漢字の中で「心」偏のつく漢字を『諸橋大漢和辞典』の中に数えて見ると、「心」から始まり、「^甚慚」に終るまで、実に一千二百三十四字にも及ぶ。勿論この中には俗字と正字の同一文字が含まれるので、この数全てが異なる漢字という訳ではない。しかしそれにしても決して少ない数ではない。

これらの「心」偏のつく文字は大なり小なり、何等かの形で、「心」に係わりのある意味を持つ文字である。これは一体何を意味するのであらうか。これもやはり漢字を用いる人々の「人間の心」への取り組みの足跡と見るべきではなからうか。そしてしかもこの数は、漢字によって表記された「人間の心」の広がりの意味するものといつてよいのではなからうか。

(つづく)

《世相のスケッチ》

転勤



「やあ、しばらくだね。みんな元気なんだろう。」

「ご無沙汰いたしました……。女房も、がんばって稼いでくれます。故郷の妹も、どうやら元気になって、こんど婿をもらうとか言っていました。」

合ごう島じま
近ちかし

(電気タイムス社長)

「オヤジさんは相変らずのようだね。」

「ええ、相変らず麻雀に夢中で、いいカモになってるようです。」

「僕らが子供の頃は、自慢の伯父さんだったんだけどね。やっぱりあの事故に遭って、頭がすこしおかしくなったのかねえ。」

「すこしじゃないですよ。母が死んでからますますひどくなりました。こんどの養子をもろう話も、一文なしにならんうちに、という意味もあるんですよ。とにかくオヤジの話になると癪にさわることはっかりで……。」

「君、子供さんはまだかね。ずいぶんゆっくりなんだなあ。結婚してから何年になるかい。」

「八年です。まあ、いろいろありまして。」

「ところで、改まって相談ってなんだい。お金貸してくれ、なんていわれても困るんだが……。」

「実は私、こんど会社をやめようかと思いついて……。」

「へえ、それはまたどうして？ たしか厨房器具の営業だったね。一般は住宅関係も不景気ときくが、やはり思わしくないのかね。」

「いやあ、会社自体の調子はそんなに悪くないんですが、こんど転勤させられることになったんです。」

「転勤？ いいじゃないか。役所なんかでも、転勤のひんばんな人が出世が早いというケースが多いよ。」

「私の場合は、テイのいい左遷なんですよ。埼玉のほうにある工場の管理だっていうんですが、どうせ、たいした仕事じゃないでしょう。」

「給料はちゃんとくれるんだろう。」

「いまと同じぐらいらしいです。実はいまのところ、女房が月に十三〜四万円稼いでくれるおかげでやってゆけるんですが、転勤すると、そんなに勤め口はないんじゃないかと、女房もひどく反対しています。」

「奥さんの気持ちもわからんではないが、会社には会社の方針があるんだから、それに従わないとなると、退職が普通だからねえ。」

「そうなんです。それで、どうしたらいいか相談に乗ってもらおうと思ひまして……。」

「相談に乗るつたって、こんなの、僕には判断できないよ。」

「私は営業が向いてると思いますし、工場へ行ったら、私の能力を発揮することはできないと思うんです。」

「うーん。でも、会社だって、十数年間、君の仕事ぶりを見ての判断だろうからね。」

「実は、去年ちょっとしたミスをおかしまして、会社に百三十万円ほどの損をかけてしまいました。キャンセルされた場合の条件をはっきりさせておかなかったという、ほんの初歩的なミスでして、でも、これは月賦で返してゆける自信がありますし、営業さえ続ければ、いづれ十分利子つけて返金できると思うんです。」

「でもねえ、会社としても、そう短期間の実績で判断したんじゃないだろうからね。」

「それじゃ、転勤命令に従うべきだとおっしゃるんですか？」

「僕がなんと言おうと、要は君の考えしだいだよ。」

「私としては、この際、いっそ会社をやめて

しまおうかと思っています。会社のやり方に、ある憤りを感じますし、男としての意地もありますから……。」

「ほほう、立派だね。そこまで開き直れるというのは、それだけの能力があるからだよ。で、やめた後の仕事はどんな？」

「いやあ、それがまだ適当なのがないんですよ。」

「でも、友人かなんかから、一つや二つの誘いはあるだろうか？」

「いえ、そんなのはありません。ですからひとつ、ぜひその点、相談になっていただきたいと思ひまして……。なにか私の能力をフルに発揮できるような仕事を……。」

「おいおい、ちょっと待ってください。能力っていったいなんだい？ 計算ができることかい？ 英語ができることかい？ そんなの、学校出たての女の子だってできるよ。いいかね、能力とはなにかということをよく考えてみるんだな。」

さつき立派だと言ったのは、それだけの裏付けがあるからだと思つたんだ。十数年の立派な実績があるのなら、一つや二つ、君の能力を買おうという人がある筈だからね。もっとも、実際に立派なら、いまの会社が粗末に扱わんだろうけどね。」

「それじゃ、あなたは、私の能力をたいしたことないとおっしゃるんですか。私の仕事ぶりを知らないのに。」

「知らないね、君の仕事ぶりは。でもおよそ想像はつくよ。」

「評価が低いわけですね。」

「敢えてはつきり言おう。君は僕の身内だから、そのほうがいいと思う。たいした仕事ができてる筈がないね。それは、君のきょううの態度をみただけでもわかるよ。」

まず、喫茶店での席。僕なんか、どんな場所へ行っても、そこでの目上の方の席はどこかすばやく探し、座ってもらうよ。ところが君はなんだい。年輩者であり、これから相談

に乗ってもらおうという人を、平気で通路側に座らせ、自分は壁を背にゆつたり。しかもだ、カバンにもたれるように体を斜めにし、足を組み、それもずつとこちへ伸ばして貧乏ゆすりするものだから、僕の足をしばしば軽るく蹴ることになる。

それに、けしからんのは、たばこを吸わない僕に、ことわらないどころか、なんべんも、顔に真正面から吹きかけてくる。もうこれだけで、僕にいわせりや、営業マンどころか、サラリーマンとしても失格だね。」

「なるほど、おっしゃることはよくわかりました。実は昨晚ロクに眠ってないし、腹も減ってイライラしてたものですから……。」

「それだよ、その言いわけをする性根が、僕に言わせりや、そもそも最低なんだよ。ほんとうの能力のない奴に限って、なんだかんだと言いわけをする。いいかい、たとえ虫歯に苦んでいようと、下痢していようと、だからといって礼を失したり、約束ごとを違えた

りしていい筈はあるまい。たとえ死に直面してる場合でも理屈は同じだ。

さっきの仕事のミス話でも、君は反省より言いわけのほうが先になっている。そんなふうだからミスもおかすし、会社としても単なる一時のミスとして扱にくいのだろう。会社にとって、将来大きな成果をもたらすような人材なら、会社が手放すもんかね。」

「……………」

「君はなまじ英語がすこしばかりできて、高校時代から、自前のコンサートかなにかやって、物おじしないところがあつたから、それをもって即外交能力と考えたんだろう。むろん一つの能力ではある。しかし、それはほんの一部分にすぎない。部分部分の能力者はいくらでもいる。ほんとうの能力とは、相手の心をいかにつかむかだろう。さっき君の態度を非難したが、あれだって、単なる動作だけの話ではない。心が伴わなければ、先方様の心はつかめないよ。」

「それに君は、以前からなにかというと、親の悪口を言い、いろんなことを環境のせいにするところがあつた。しかし、これまででは、君が社会人として立派にやっていると思ふから言わなかつた。しかしきょうは敢えて言つた。それは四十にも手が届こうという男が、こんな勘違いをしてどうするか、このままじゃ、これから先ももっと苦しむことになると思つたからだ。気の毒な人は世の中にいくらでもいる。しかし、それに負けないでいる人がたくさんいる。自分を不幸だと思ふ人は不幸になると思う。君は環境に負けてるよ。そんなことじゃ、一生幸せになれないよ。」

「……………」

「とにかくはつきり言つた。怒るなら怒れ、もう決して近付かんというなら、それも結構。よし、今にみてみる、見返してやる、と一念発起するなら、これほどうれしいことはない。」
「よくわかりました。この際は転動に應じ、そのうえでじっくり勉強します。」

◇◇竹中信常博士頌寿記念論文集◇◇

宗教文化の諸相

「編集・発行」 竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会

「体裁」 B5判変型一四〇〇頁 定価三五〇〇円

○すいせんのことば

浄土門主・知恩院門跡 藤井 応

〔宗教人必読の書〕——竹中博士の頌寿と大正大学ご退任を記念して刊行された『宗教文化の諸相』を拝見させて頂きますと、今日の学界を代表される内外の学者が寄稿され、しかも内容は多岐にわたる専門分野がカバーされています。博士の人となりと、学問の広さを如実に示しているといってもよいでしょう。今日、仏教界をとりまく現状はきびしいものがあります。幅広い知識と絶えざる研鑽が宗門人に要請されています。本書はまさに時機を得た恰好の書といつてよいでしょう。広く江湖に推せんしたいと思います。

●発行●

〒170 東京都豊島区西巣鴨三丁目二〇番一号

大正大学宗教学研究室内

竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会

電話〇三(九一八)七三二一番

●申込方法●

書店に御申込の場合は定価三五、〇〇〇円。

△発売元 山喜房仏書林△

み仏とともに

=2=

—^み三^やッ谷村の念仏信仰—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

近江の国は、仏教信仰の盛んなところである。とくに浄土念仏信仰が盛んで、各村の立派な寺の本堂の屋根が四季の日の光の中で、高く聳えて輝いているのが、そのシンボルである。

私の父母も、大へんな念仏信者であった。子供の頃、朝早く、父が仏壇であげる念仏の声と、木魚の音を、夢うつつの中で聞いていた。床の間の横にある、一間幅の立派な仏壇は、近江独特なもので、その金額も相当なものとして聞いている。それはまた、信仰の深さを示している。それ程豊かな家でもなくとも、仏壇だけは立派である。

私の子供の頃は、どの家もかやぶきの屋根であった。それはそれなりに風情があったが、時代がたつと、いかにも貧乏くさいものであった。ふき替えには、大へんな金がかかることもあって、村の中には、相当傾きかけた家もあった。

今では、どの家も瓦ぶきで、立派になった。豊かになったのである。しかし、私の家も、昔は半分近くを小作で暮らしていたようで、村でも中流以下であった。そうした暮らしの中でも、仏壇だけは立派であった。そして、家

の中で、「南無阿弥陀仏」という、念仏の声が絶えなかった。

父母は、食事をする時も、一口頂いては「なむあみだぶつ」といい、茶碗を押し頂いていた。何か一言いって「なむあみだぶつ」。それこそ、トイレの中でも「なむあみだぶつ」で、法然上人の教えを、地で行っている



— お仏壇 —

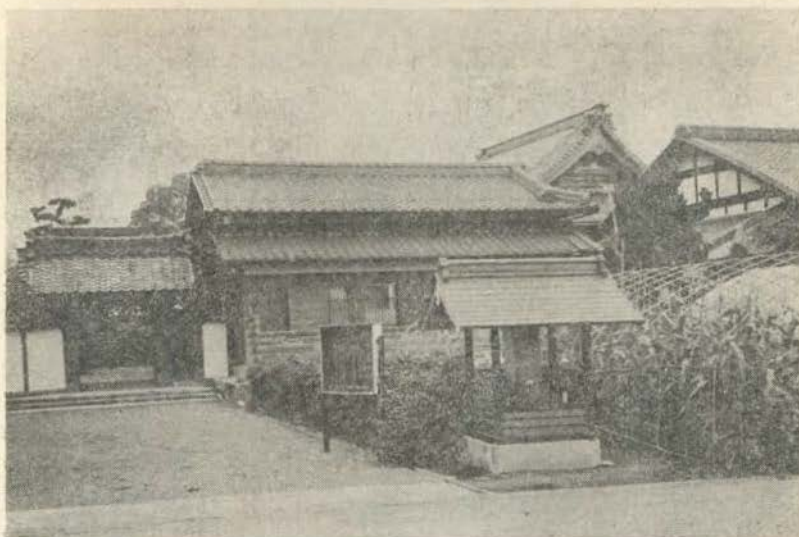
ような毎日であった。

そうした念仏生活は、父母に限ったことでなかった。

朝夕のおつとめは、どの家でもかかさず行われていて、どの家からも、木魚や、ふせがねのカンカンという音が聞えてきた。村中から、それらの音が聞えてきた。

私の村は三ツ谷という。百五十軒足らずの小村であったが、寺は三軒あった。本願寺と浄土宗と禪宗である。各家は、そのいずれかの寺の檀家であるが、禪宗は僅か十軒程で、あとは本願寺と浄土宗が半々で分けあっていた。檀家十軒では、寺の維持もできないので、村全体で、お互いに助け合って、寺の維持に協力していくという美風があり、どの寺の法要にも、村全体でお詣りして、お説教を聞くというならわしであった。

私の家の檀那寺は、常光寺という浄土宗の寺で、私の生涯を左右した人びとが、ここの住職であり、この寺に縁のある人びとであった。それは又後にゆずるとして、この寺では、年に何度かの法要が行われた。浄土宗で高祖と仰ぐ善導大師の善導忌、法然上人のご命日にあたる御忌、盆、彼岸はいうに及ばず、秋のお十夜など、恒例の法要とお説教が行われている。



—常光寺—

昔はテレビのような娯楽がないので、お説教は村での楽しい集まりであり、村中の人がつめかけて、広い本堂は一杯になった。子供の頃、私もつれていかれ、母親の膝枕で、あめをしゃぶりながら、そのうちに寝てしまうことしばしばであった。

説教は、近県の有名な坊さんがやってきて、面白おかしく、時には涙を流さるような哀話もふくめ、昼夜にかけて話をした。二日間の大法要も、時には行われ、毎日、説教があった。父母は、これにかかさず参詣していた。そして、その話を通じて、浄土念仏信仰の有り難さを、骨の髄まで体得していた。浄土宗の難しい教え——宗学・宗乗という——についても、下手な坊さんよりもよく知っていた。説教を通じての、勉強であった。

時々、父などは、説教が終ると、説教師さんの所に掛け、疑問とすると、聞いただしたりしていた。私は、宗学や宗乗を専門にしたわけでもなかったの、後年、父の質問にたじたじすることしばしばであった。

説教は、他宗の寺でも行われ、それにも父母達はか

けて聴聞していた。そんなわけで、他宗派の教義にまで精通していた。そして、暇があると、各宗要義などを勉強していた。全くおそれ入った話である。

父は率先して、寺に念仏にかけた。それがやがて、念仏会という有志の集まりとなり、月に一度か二度、木魚を持って念仏会を持つことになった。夕食を終った父母は、木魚をふる敷に包んでかけた。暗い夜道を、母に手を引かれて、一緒に寺に行ったことも、何度かあった。はじめはちゃんと坐って、一緒に念仏をしていたが、そのうちに、母の膝枕で、寝てしまうのが、常であった。

一時間ばかりの念仏が終ると、書院に集まり、お茶やお菓子をご頂ながら、しばし雑談にふけるのが、ならわしであった。話の中心は、多く父がなっていたように、記憶している。なかなかの物知りで、話の好きな父は、いつもこうした時、話題の提供者のようであった。

私の父母の信仰生活は、このようであった。

それだけに、寺への奉仕も、人一倍はげんだ。後には世話人にもなるのであるが、寄附などにも、精をだしていたようである。根からの善人であったと、私は思っ

いる。



父母の念仏信仰は、やがて子に向けられるようになった。夕方のおつとめは、これは大体、夕食の終わったところになされるのであったが、家族一同でした。私は末っ子で、上に姉と兄がいた。父が仏壇の正面に坐り、一同その後で、浄土宗の勤行式にのっとって、大きな声でお経をあげた。小学校に行く頃には、一かどのおつとめができるようになっていた。勿論、「四誓の偈」などは、宙でできた。習わぬ門前の小僧が、お経を読む類である。

私が小学校に行くようになってから、父母には一つの希望的考えが、でかかっていたようである。それは、次男坊である私を、寺に入れ、坊さんにすることであった。当時、大した農家でもない家では、長男は家業を継ぐとして、次男以下は、何処かに丁稚小僧に行くのが、ならわしであった。当然私も、その運命にある一人であった。

父母達は、私を奉行にだすなら、お坊さんにしたいと考え、檀那寺の上田純教上人に相談した。

「説教師さんでもきたら、何処かよい寺がないか、相談してあげよう」

純教上人は、後年、私もその人となりに接する機会をしばしば持つのであるが、田舎寺の住職としては、仲々に立派な人であり、又識見もあった。そして、やさしい反面、厳しい人でもあった。

「寺にやるということは、大へんな修行であるが、あなた方は覚悟はできていますね」

「私どもは覚悟してはいますが、果して、子供がいうことを聞いてくれるか、これが大変です」

両親は、自分達の覚悟はよいとして、果して子供が納得するかどうか、難関であった。

それからいよいよ、父母達の、私に対する説得工作が始められた。

(くぐく)

◇“浄土句集” 欄投稿要項

多くの方々のご投句をお待ちしております。お仲間の方々も広くお誘い合わせ、一句でも多く投句して下さい。大本山善導寺のご法主であられます一田牛畝先生も大変にはりきっておられますので、ふるって作句して下さい。

一 ハガキ一葉に四、五句づつ、あるいは封書に何句でもお書き下さい。

一 投稿先――

〒839-111 久留米市善導寺町飯田550
大本山善導寺 一田牛畝先生宛

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14
正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6
法然上人讃仰会

(読)(者)(の)(べ)(い)(じ)

終戦四十年をけみして

遙かなるビルマ戦没者慰霊の旅



おく やま せい けん
奥山清賢

(宮城県米山町専興寺住職)

昭和六十年二月十九日より三月三日まで、ビルマ戦域、戦没者慰霊巡拝団に参加いたしました。特に御門主より団員依命を拝受いたし、浄土宗よりは五カ所における供香を頂戴

し、八カ所にて慰霊読経、そして供香焼香をして帰寺いたしました。

最初にラングーン「タモエ陸軍基地」にて供養をさせて頂きました。特に感銘したの



は、その陸軍墓碑の側に、大理石の名号碑に総本山知恩院名号供養碑のあったことです。なおラングーンには日本人墓地があり、日本各地より訪れた団体や個人の供養のまごころの思いを込めた墓標塔婆が捧げられておりました。しかしその中「タモエ陸軍墓地」は訪



——「南無阿弥陀仏」の名号碑の前で
塔婆、供物を供えて回向する筆者——

れる人もなく、枯葉が散乱し、唯一の救いと思われるのが、この御門主の名号碑でありました。これに比べて、英印軍墓地は広大な敷地を有し、二万余の戦歿者一基毎併列されて、常時イギリス政府支給の雇人による整備に努め、厳肅華麗に祀られてあり、経済大国日本

のわびしさを感じたことでした。

バガン、ベグー、タウンジ、メークティラ、ビヨボエ、マンダレー、メイメヨウ等の戦跡を巡りました。各地で、日本より持参した、戦友や遺族から寄せられた心暖かい供物をお供えし、私自身も塔婆や、散華をたむけたわけです。あるバコダ寺院においては、その一隅を借りて木の墓標が建ててあり、あるいはこれが風化し、また戦友巡拝のコンクリート建ての墓標が建っていました。往時の戦火の日々と、今この現状をまのあたりにするにつけて、ただただ



涙が溢れ、戦争の非常を感じ、平和の尊さをあらためて痛感いたしました。

巡拝の旅で、多くの現地ビルマ人に接しました。ビルマは仏教国で、バコダは林立し、寺院は聖域広大でした。その一隅を借り、あるいは奥深き裏に、コンクリート碑等があり、老齡の遺族、拙僧等の供物やその他の手荷物を持参しながら、徒歩数十分を要した参拝の歩みはきわめて難渋いたしました。しかし、ビルマの老若皆そろって、その荷物を持って、あるいは手を引いてくれるなど、まことに仏教徒の温かさを感じました。戦死者遺族の老齡未亡人等は涙して感謝しておりました。そして彼方此方とその場所を親切に教え知らせてくれました。

ことにビルマ仏教は、現に今ビルマの人々の心の中に実際に生きていることを感じました。帰国して、仏教に深く帰依して、念仏生活に精進をいたすことをあらためて確認したことでした。

|| 好評発売中 ||

竹中信常著

『仏教への問いかけ』

B 6判函入 二七五頁

定価 三五〇〇円 (千二百五〇円)

〔普及版〕 B 6判 二三五頁

定価 二八〇〇円 (千二百五〇円)

○ 仏教の生活信仰を、宗教学の学問的蓄積とその真摯な実践体験を通して、改めて問いかけ、語りかけようとする――

山喜房仏書林

〒113 東京都文京区本郷五―二八―四
振替 東京〇―一九〇〇

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（二）

—大同から蘭州へ—



木の
下
隆
一

（随筆家）

先ずはじめにお詫びしておく。先月号で、雲崗の目玉は三体の露坐仏と書いたが、これは私の記憶違いで、大仏に一对の脇侍という先入観と、大同市内で買った絵葉書の写真が裏焼きされていたことから生じた混乱で、この第二十窟の露坐仏は、大仏と大仏の左側に立つ一体の脇侍と訂正しておく。この窟は外壁が崩れて露坐仏となったとか。もう一体の脇侍はその時損壊したのかも知れない。大仏

の右側にそのスペースは充分にあるのである。

さて、午後最初に訪れたのは九竜壁であった。この九竜壁というのは、何のために造られたのかさっぱり判らない。紫禁城内でも九竜壁は見たし、雲崗からの帰途見かけた観音堂の入口にも、三匹の竜が躍動する三竜壁というのがあった。単なる装飾壁なのか、従来は建物の一部の壁として使われていたものか……。五色の瑠璃瓦に九匹の竜を浮き彫りにして一枚一枚張り合わせた、高さ八メートル、長さ四十五・五メートル、厚さ二・〇メートルという堂々たる建造物である。明の洪武年間に藩王府の前照壁として建てられたもので、現存する九竜壁としては我が国最古最大の物であると、絵葉書には簡単に解説がなされていた。とすると、為政者の権力誇示のために造られた物であろうか。偶数を好む中国で、なぜ竜だけは奇数なのかという素朴な疑問が残った。

この九竜壁の前には古い家並が保存されていて、暖房用の煙突を持った小さな土屋が櫛比している。ぼつりぼつりテレビのアンテナが立っているのが、僅かに現代を感じさせるだけである。新しく建てられている家屋も、古い様式を模していた。回教の寺、清真寺も独特のモスクを持つでもなく、古い家並に埋没してしまっている。

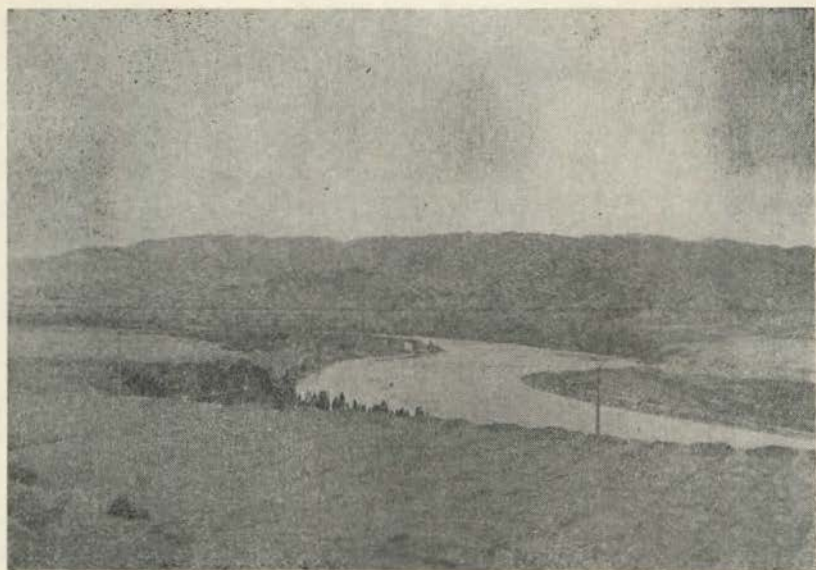
九竜壁を出て、丘の上の華嚴寺に向かう。本堂の大雄宝殿は東大寺の大仏殿を小さくしたような造りで、鷄尾の形もそっくり。それもそのはず、華嚴宗の本家はこちらなのだから、なんら不思議はないのである。石段を降りて、少し離れた下華嚴寺に赴く。ここには遼代の彩色彫塑が多数安置されている。中でも微笑する女菩薩像は有名で、切手の図柄にもなっているそうである。はにかんでいるようにも見えるし、冷笑しているようにも受け取れる。広隆寺の弥勒菩薩のあえかな微笑に比べるとかなり濃艶で、なじめない感じがしないでもないが、中国でも屈指の美しい仏像であることは確かである。この微笑、東洋の神秘とでも言うておこう。どちらの華嚴寺も内部の写真撮影は許されなかつ

た。

夕方、大同駅前広場をぶらつく。果物や野菜、ジュース、揚げパンを売る露店、がらくたを並べた古物商、衣料店、ジージャンの専門店等々。朝にも増して大変な人出だが、食料を扱う店以外は、売行はかんばしくないようである。靴底に頑丈な鉄を打つ靴の修理屋が繁盛しているのは、終戦後の日本の闇市を彷彿させる眺めだったが、闇市がまともだった陰湿さは全く無い。縄抜けの大道芸、人を集めていた。黒山の人だかりである。「これが本当のダイドウ芸人だ」と誰かが言ったので、大笑いになった。

午後六時二十分、蘭州行の列車に乗る。蘭州まで約二十七時間四十分の旅である。ここでツアーのメンバーを簡単に紹介しておこう。佐藤密雄博士のご一家、お嫁さんの美智子さん、お孫さんの孝雄君以外の方々は、私は初対面であった。宝仙短大の紀野先生、美智子さんの日本画のお仲間であるさん、Tさん。ご夫婦で参加されたYさん。Yさんの奥さんの女学校時代からのお友だちのNさん。鎌倉在住の漆芸家MY氏。I氏。O氏。プロカメラマンのS氏。孝雄君の大学の友人G君。大学院生のM君。旅の間中、ホテルですっと同室させて頂いた京都の藤原さん。日本からの添乗員の寺山さん。北京から上海まで十四日間同行してくれたガイドの王さん。男性十二名、女性七名、そのうち六十歳以上の方が半数を占める高齢者集団である。

列車が発車してしばらく経つと、急に日が暮れた。大陸の秋の入日も釣瓶落としのようである。西の空に七日の月が輝いている。月面を薄い雲が掃いては通り過ぎる。どこをどう走っているのか判らないが、時々暗い灯りが餐車(食堂車)の窓にともっては消えて行く。食堂車の晚餐は充分堪能した。何品出たか覚えていないが、忽ちテーブルの上が一杯になり、皿数を減らしてテーブルに余裕を持たせるために、ひたすらに食べ続けなければならなかった。狭い食堂車の台所で、よくもまあこう次か



——車中より見た蛇行する黄河——

ら次へ料理が出来るものだと感心する。燃料は火力の強い大同産の石炭である。列車を引張る蒸気機関車は大同工廠製で、大同産の石炭を焚いて力強く走っている。蘭州^{ラン州}啤酒の酔いがじんわりと体を包む。さすがに疲れた。軟臥車のベッドで目覚めたのは夜半過ぎであった。肩がしんと冷えて目覚めたのである。他の人の眠りを邪魔しないようにウィンドブレーカーを着て廊下へ出、窓際に設けられた折りたたみ式の椅子に坐って煙草を喫む。月が落ちて、窓の外は漆黒の闇である。成田を一昨日出たというのが、どうも実感として湧いて来ない。旅は始ったばかりだというのに、もう十日も旅している気分である。汽車の旅が、ゴトンゴトンと体に伝わって来る震動が、そんな思いを生むのかも知れない。時計を見ると、二時半を廻ったばかりである。俳句でも作るしかないか——。ポケットからメモ帳を取り出して、日記風の句^{したな}を認める。

(成田) 秋暑し成田翔つ朝晴れ渡り

(機内で) 断雲の下東支那海は秋

(北京) 沿道の槐の並木返り咲き

秋空へ風揚がる天安門広場

おほらかに北京秋天風乱舞

秋夕べこも交通渋滞す

(大同へ) 灯が恋し秋の闇行く汽車の窓

(雲崗) 秋さびし崩れて残る烽火台

秋澄むや窟に在す弥勒仏

交脚の弥勒菩薩の笑み澄めり

(華嚴寺) 華嚴寺の鷗尾に秋の日集まれる

複雑に笑むや秋暑の女菩薩像

夜が明けると、列車はゴビに近い原野を走っていた。処々オアシスがあつて、ひと塊りの民家が土屋の低い軒を寄せ合っている。玉蜀黍は大方収穫を終わっており、粟であろうか黍であろうか、脱穀した雑穀の実と殻を風で飛ばして選り分けている。つい三十年ほど前までは、日本の農村でもよく見られた光景である。長い棒の先に短い腕木を付け、それに回転する棒を取り付けた脱穀用具も懐しい。

昼食の時、万里の長城の残骸が見えた。長城といつても立派なものではなく、枝城に過ぎないが、殆ど崩れて風化した土塁が地表を這うように連なっているだけである。食堂車から帰ると、若者三人

は早速ガイドの王さんを囲んで、中国語の学習を兼ねた歌謡教室を始めた。王さんは実によく日本の歌を知っている。彼女は大学で数学を専攻したが、それを生かす職には就けず、ホテルの日本語学校で日本語を学んでガイドになったという。二十三歳の娘さんである。なかなかきれいな日本語を話す。ほぼ正確な敬語が使えるのには驚いた。日本の若者の敬語の使い方が、近頃あやしくなっているというのに、どんな勉強をしたのであろうか。

午後一時、青銅峽という駅に着く。材木の集散地なのか、大きな貯木場があった。二時半石空を過ぎる。駅の花壇に咲いている赤い白粉花が印象的。ここを過ぎてから稲田が拡がり、よく育った田圃の中には早々と案山子が立っている。日本の案山子をつくりなのがユーモラスである。水の豊富なオアシスなのであろう。田の畦に簪草に似た草が風に揺れている、中国でもこれを束ねて簪にするのだろうか。原野を突切って延びる無人の舗装道路の両側に。ポプラの若木が並木となってどこまでも続いている。木の若さから見ても、この道がつくられたのは、そう遠い昔のことではあるまい。二時四十分、珍しくトンネルを抜ける。舗装道路はここで尽きて、砂利道になっていた。三時、中衛駅に停車。プラットホームのすぐ脇に、二十五メートルはあろうかと思われをポプラの枯木が、白い焰を噴き上げたような姿で立っていたのがいまも目にある。ここを過ぎて、鉄路はゴビから沙漠地帯へ入って入った。沙漠にも結構草は生えている。紫の萩に似た花はタマリスクか。黄河蛇行し、河に沿う道も鉄路も蛇行しながら蘭州を目指す。雲多くなり、風強まる。砂丘の天辺が真横に吹き払われて、砂が飛び、風紋は刻々とその紋様を変えて行く。七時二十二分、二つ目の長いトンネルを潜る。密雲たれ込め、落日を目にすることは出来なかった。九時五十八分蘭州到着。「ほぼ時間通り、えらいもんですなあ」とは藤原さんの言。蘭州は海拔千二百メートルくらいか？ 秋冷の気が満ち満ちていた。

(続く)

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』五月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林先生の版画絵のほか、大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―二八七

立ち止まるな善導

<11>



寺内大吉

挿絵・松清達文

江南の残月 (二)

四

王古の「新修往生伝」にある「幼ニシテ密州ノ明勝法師ニ投ジテ出家ス」の記載が事実だったとして、誕生地が泗州では遠隔すぎる、同じ王古が言う「臨淄ノ人ナリ」が正し

いと主張する現代流の解釈に、いささか反論しておきたいと思う。

たしかに現代の地図上をなぞれば密州へは臨淄の方が近いであろう。しかし善導が生まれて密州で出家するまでの隋王朝の末期、大業年間の交通事情を検討しておかねばならない。臨淄から密州へは長白山系の峻嶲を越えてゆくこと、その山中は叛徒群賊の巢窟だっ

た事実を計算に入れよ、とは前章で指摘したとおりである。

ちなみに大業年間、長白山を根城とした叛徒群賊は組織的軍団を擁した者だけでも郝孝德、杜伏威、左才相、李子通、王薄など枚挙にいとまがないのである。無頼な農民や逃亡した官兵が、いったん長白山へ流入し、そこで類を呼び仲間があい寄り、集団化して中原へ進出する共通の過程をたどったのである。

山頂にはいつも白雲がたなびいていたことから長白山と呼ばれた群盗の巢窟。そんな危険な山路を七歳の幼児が出家するために越えいったであろうか。

これとは逆に泗州から密州へは、きわめて安全で多くの旅人に利用されたルートが開けていたのである。

善導が在世したときより二百余年後のことになる。わが遣唐船が中国へ渡った。藤原常嗣を正使とした第十七次遣唐使である。これに同行した慈覚大師円仁の「入唐求法巡行

記」という貴重な旅行記録がある。

それによると彼らはわが承和五年（八三八）の九月、無事に中国大陸へ接岸した。その十二月には長安の都へはいった。年が明けた正月には文宗の謁見を受けている。大任を果たし三月帰国の途についた。

三月二十三日、泗州のすぐ東方の町楚州から淮河を下航して海州へ向う。往き交う便船はおびただしい数で、遣唐船はいちいちそれらと接触、同時に日本を出発しながら東支那海ではぐれた仲間の船の消息を問いただしている。また沿岸の町にも一つ一つ立ち寄りして見物することを忘れない。のんびりと航海を続けながら、それでも四日間ほどで海州へ到着した。

海州は東支那海に臨む港である。あとは外洋を一路故国さして帰るのである。

ここで遣唐船を操縦していた新羅人の水夫が提案する。海州から北へ海上一日の行程で山東半島の密州へ着く。そこからは潮流が九

州博多まで直流しているというのである。この潮の流れを利すれば、あとの船旅は易々たるものになる。

しかし遣唐使の一行は、この提案に仕かけられた畏に気づいた。潮流が曲者なのだ。密州からの潮流は日本列島へではなく朝鮮半島へ向けて流れていたのである。新羅人の水夫たちは、遣唐使一行を俘虜として新羅王朝へ売り渡そうと企んでいた。この提案はしりぞけられ、そのまますぐに日本列島を目ざした。

企らみを回避した小事件はともかくとして、この記述は泗州から密州までのルートを明示してくれる。楚州へ出て、そこから海州へと淮河を下り、さらに海路をたどり密州へと船旅が続けられるのである。そんな便船が常時就航していたことも想像できる。七歳の少年善導を、その便船に乗せたら、殊んど四日間の行程で（遣唐船はじくざく航行だったから、さらに短縮できたであろう）安全に山東半島

の密州へ到着したはずである。

隋朝末における山東から江淮地方の不安定な情況を考えたとき、水路に頼ることだけが安全なルートであった事実を思いおこすべきである。危険きわまる長白山中を歩行することこそ七歳の少年には不自然な行動であり、それが善導誕生の臨淄説を支える論拠だったとすれば矛盾も甚だしいものになってくる。

臨淄か、泗州か。近時日本におけるこの選択には、やや宗派争いの色彩が濃厚である。臨淄説は浄土真宗、泗州説は浄土宗、と大別できる。ただし臨淄説が岩井大慧氏などによって学問上の考証を緻密にしているのに対し、浄土宗の泗州説は「教学大会における決定」などと無茶な対応しかしていない。泗州説を主張するのであれば、それなりの根拠を提示しなければならない。

岩井大慧氏の臨淄説は、距離感のほかに本人とその誕生地との関連を主張している。

——名僧知識が輩出した場合、その多くは

その出身地方に、その教派に属する後継者の
あい継いで輩出するものである。もし善導が
泗州から出たとすれば、泗州が少くともその
近県からその流れを汲む者が一人や二人は出
現していてもよいと思う。またその生存中、
一度や二度は故郷へ帰って郷民を勸化したこ
とがあってもよからうと考える。

としたあと、臨淄を主邑とする山東地方か
らは善導の後継者と言われた大行禪師やその
弟子の道鏡があらわれた、と強調する。要す
るに泗州には善導にかかわる痕跡が皆無だと
言うのである。果たしてそうであらうか。

岩井氏の文章をさらに追うと、

——然るに善導と略ぼ同時代に泗州には、
西域から来た有名な僧伽大師がいて、泗州臨
淮県信義坊にその化を垂れていた。善導と彼
との間には何等の交渉あるを聞かない。

と断定している。たしかに僧伽和尚は中央

アジアのクシニカ（カッチクルガン地方）出身
の人で善導とのかかわりはない。

ところでわが慈覚大師円仁が渡唐した約二
十年ほどあとに、園城寺の智証大師円珍が入
唐している。その「円珍伝」によれば、大中
十年（八五六）の正月下旬、

——船を雇って汴水に入り、淮河の陰（み
なみ）の普光王寺に至る。これすなわち大聖
僧伽和尚が肉身を留めて行化するの地なり。
次で淮南、浙西を過ぐ。

とある。

淮河の陰とは泗州のことで、慈覚大師円仁
が「求法行記」でも、「六月二十二日、泗州
に至りぬ。州の管は徐（泗）節度府にあり。
泗州の普光王寺はこれ天下に著名なところ：
……」と書いている。

この普光王寺は西域の人僧伽和尚が伽州城
内の信義坊に建立したものだ。建立当時は普
照王寺と称したが、「照王」の文字が時の権

力者則天武后の武照王と触れ合うので改めたようである。

僧伽和尚は靈能僧で各種の幻術を実践したらしい。普光王寺を「天下に著名」にさせたのは、長安の薦福寺で示寂した僧伽和尚のミイラが「真身の像」として此処に安置されていたからである。来日した真如親王もこの寺に滞留して靈像を供養したという記録もある。

しかし僧伽大師や普光王寺は善導と殆んどかわりがない。この寺が建てられた泗州城内の信義坊が重要なのである。

この信義坊は北斉が支配した時代から普光王寺が建てられるまで、つまり善導が産ぶ声をあげて少年となる日まで「香積寺」と称せられていたのである。

小野勝年博士は「入唐求法行歴の研究」下巻、普光王寺の注で書いている。

——もと普照王寺といい、則天武后の諱（照）をさけて光と改めた。僧伽和尚という靈

異僧の創建するところで、寺は泗州城内の信義坊にあり、その地は北斉の香積寺の故址という。

われわれは「香積寺」からただちに思いうかべる。それは終南山麓、神和（禾）原頭にある善導の墓塔である。

五

神和原に建つ十三層の善導墓塔と並んで五層の小雁塔がある。嗣法の弟子浄業の墓と言われる。

王昶の「金石萃編」は浄業について語る。

「大唐竜興寺大徳、香積寺主浄業法師竝序」として、浄業は延和元年（七二二）五十八歳で念仏を唱えて入寂、神和原の大善導闍梨域内の崇靈塔へ葬られたという。

墓塔それ自体はもちろん後世のものである

うが、永隆二年三月十四日（六八一）に善導が息を引き取ったとき浄業は二十七歳だったことになる。彼はわが師善導の遺骸もしくは遺骨をこの神和原へ埋葬したのであらう。

そして香積寺と呼んだにちがいない。「香積寺主」は善導霊塔の「墓守り」を意味しているのか。

では、なぜ香積寺と呼んだのであらうか。それは生前、善導の口からつねづね香積寺のことを聞かされていたからであらう。生地泗州の信義坊への思い出だ。

しかもその香積寺が今や異域の靈異僧によって妖しげに改変されたことを知れば、いよいよ香積寺再興の思いが善導の胸で燃え立たはずである。師の志を浄業が継承して墓塔を香積寺と呼んだのは、ごく自然であらう。

そんな経緯には推理推測が混じりこんで論証の軸点とはなりにくい。が、終焉の地が香積寺であり、同じ名の寺が生地に実在したという簡明な事実こそ善導の生地泗州説を裏付け

ている。山東の臨淄には痕跡らしきものは全くない。

簡明な事実と言えば、善導の死についても古来の混乱に終止符を打っておく必要がある。その混乱とは王古の「新修往生伝」では六十九歳の永隆二年に従容として入寂したさまが紹介されるが、戒珠の「浄土往生伝」には「所居寺前の柳樹に登り、身を投げて自絶した」とある。

寿を全うしたのか、投身自殺をはかったのか、善導の死は古来、論議を招いてきた。真偽いづれかの判定資料として「統高僧伝」の記載がある。

——有る人、導に告げて曰く。今、仏名を念ずれば定めて浄土に生まるか、不か。導曰く。定めて生まるなり。其の人、礼拝し訖りて、口に南無阿弥陀仏を誦し声々相次ぎ光明寺の門を出で、柳樹の表に上り合掌西望し、倒さに身を投げて地に下つ。遂に死す。

善導の法文を聞いて信者の一人が自絶をはかったのである。「事は台省に聞こゆ」とも書いている。当時、有名な事件だったという意味だ。

善導が六十九歳の永隆二年三月十四日（六八一年）に間違いなく決定往生を遂げたことは、前にふれた「大唐西域求法高僧伝」からも明示される。すなわちインドへ向う前に襄陽の善導を訪ねた貞国律師が、そのあと廬山や東林を適化遊方して、垂拱の歳に錫を桂林に移している。垂拱の歳は六八五年だから、彼が各地を遊方していた数年間、その間に善導は寂したのである。さらに言いかえれば垂拱元年近くまで善導は間違いなく生存していたことになる。

ところで善導の生地が泗州ではなく臨淄かという王古説を支持するもう一つの理由に善導の俗姓「朱」があげられている。

岩井大慧氏は「善導伝の一考察」で、朱姓は泗州周辺には千に一、二の割合でしか

なく、逆に臨淄は五十人に二、三人いる、と強調する。典拠は「泗虹台志」や「臨淄県志」からの統計結果である。

岩井氏自身が「臨淄に朱姓の多く存し、泗州に絶えて少いということも善導が山東の出身であると強調する自分の考えに對して、遙かに後方から味方するように思われる」と書くように自説へ一沫の不安を寄せている。

これは王古の「新修往生伝」自体が戒珠の「浄土往生伝」を下書きとして成立していることが明らかであり、戒珠のそれは善導の入寂を柳樹から投身した自絶ときめつけているためである。投身自絶した人が臨淄出身の僧だったのではないか、という疑念も岩井氏の胸底で沈澱しているか、とも思われる。

それはともかく統計は確率を基礎とする。しかし確率は今後発生するであろう事態への予測ないし展望には役立つが、過去の歴史には殆んど意味を持たない。千人に一名か二名でも朱姓が存在すれば、それで充分に泗州は

善導の生地となり得るのである。その地に朱姓は絶対に存在しなかった、とあれば話は別である。

泗州が生地の決定的な資料を提示し得ない理由として、その地理上の条件、歴史の推移を考えねばならない。地理上ではいつも水に洗われて民家が定着し難い地域だった。流離してゆく者、漂着してくる者、とさだめない。姓氏の統計もあまり意味がないのではあるまいか。そして歴史的推移とは、清朝の康熙十八年（一六七九）の大洪水でこの一帯が水没してしまったことを指す。泗州城は洪沢湖の湖底に消え去ったのである。

巨量の費用と労力を注ぎこんで貫流させた隋の大運河は通済渠と呼ばれた。中国大陸を東西へ流れる五つの大河、白河、黄河、淮水、揚子江、钱塘を縦に結ぶ水路である。現在のそれよりはかなり西寄りになっている。洛陽の東の開封に発し、鄭州、宋州、宿州、泗州、楚州、そして揚子江の揚州へ出て、さ

らに南の蘇州、杭州へと至る。

完成させたのは隋の煬帝である。

善導が生まれた大業九年（六一三）前後にかけてこの通済渠をおびただしい船団が上下したはずである。南行する船には兵士を、北上するものは江南の豊かな物資や美女を満載していたことであろう。隋の煬帝は江南の地に異常な執着を示し、版図の拡大をはかり、貪慾に収奪をくり返した。

煬帝自身もしばしば南行している。「隋煬艷史」が描く彼の船は船首を竜頭で飾り、二層造りの船体に莊嚴をちりばめた豪華なものであった。紅衣で固めた隋の官兵を満載した軍船が前後を護り、竜舟上では歌舞の音曲が華やかにくりひろげられていた。

大運河上の華美にそむいて沿岸の地は貧窮と飢えとで民の姿も見あたらなかった。

——黄河ノ地ハ千里煙リ無ク

江淮ノ間ハタダ一面ニ草繁ルノミ

隋末の遺文に描写する。ちなみに煬帝の父文帝が乱世に終止符を打ったところ、この国の全戸数は八百九十万戸を数えたと言いが、隋末には二百万戸そこそこに激減している。限りない徴兵と徴庸で、民衆は家を保有することが出来なくなっていたのである。

善導が三歳になった大業十二年（六二五）の七月、煬帝は最後の船旅を揚州へ向けている。船上には正妃の蕭皇后もいたはずである。

泗州や楚州の人々はこの竜舟を眺めに河岸まで出ていったことであろう。煬帝を拝するためではない。目ざす相手は蕭皇后であった。

蕭皇后——梁武帝の孫、蕭暉王の娘である。

一代の崇仏帝だった梁武帝が健康城内で憤死したあと、その血を引く皇子や王孫たちは江南の各地で独立した。梁武帝の血筋と聞けば兵力は即座にととのったのである。荊州や

襄陽にはかなりの規模の政權もできたが、悲しいかな、これらを糾合する英傑が出現しなかった。

蕭暉王もその一人で、泗州のすぐ東南の町に本拠を据え、小王國をつくった。その首都を都梁城と呼んだ。

やがて隋の煬帝が江南の地へ食指を伸ばしてきた。まっ先にこの都梁城をねらった。通済渠完成にも欠かせぬ拠点だったからである。武力を行使しないで、和平手段で蕭暉王を口説いた。娘を正妃に迎えることを条件とした。

——梁王久シク荆楚ノ地ニ踞跡シ、旧都健康ノ恢復未ダ成ラズ……

と仰々しい詔勅まで発して彼女を迎え入れた。必ず梁王朝を健康城に復活させてやる、と約束したのである。

この詔勅は必ずしも空手形ではなかったようである。蕭皇后の女性としての魅力が煬帝

の心を酔わせた。たびかさなる江南への旅で、煬帝は本気で梁王朝の復活を考えたフシがある。何と言っても梁武帝の崇仏思想が江南の人心を深くとらえていたからである。また煬帝自身も篤く仏法に帰依していた。

蕭皇后が乗船した竜舟がやってくる、江淮の住民たちがこぞって迎えたということは、その殆んどが旧梁朝の遺臣たちだったため、なつかしい王家の娘をひと眼見たいと願ったからにちがいない。

そのなかに善導の生家の人々もまじっていたかもしれない。あとでくわしく触れるが、どうも善導の生家には梁王朝遺臣の血が流れていたように思われるのである。

六

大業十二年七月、隋煬帝の船旅を「最後」と書いたのは、揚州へ到着した彼は年が明け

た春宵、護衛長官だった宇文文化及のためにその首を斬り落されてしまったからである。

叛徒宇文文化及は、煬帝と皇子は殺したが、同席していた蕭皇后には手を出さなかった。そればかりか、自ら新帝に就くと膝を屈して彼女を正妃に迎えたのである。

蕭皇后はよほどの美人だったにちがいない。美形に加えて梁武帝の血統を引くあふれる気品が男どもの心をとらえたのであろうか。しかし、この美貌と気品とが彼女の生涯を流転の渦へ巻きこんでしまう。

隋の煬帝を滅し、蕭皇后を手に入れて、颯爽と通済渠を北上していった宇文文化及は、大黄河で水賊と遭遇する。各所の水賊を糾合して河北一帯を制圧しつつあった宝建徳の大軍である。

宇文文化及は遭遇戦を避けて北岸に上陸し、魏州城へ逃げこむ。だがここもたちまち包囲され、山東方面へ脱走したところで捕らえられる。河北へ護送の途次、宇文文化及は斬られ

た果てた。

蕭皇后はどうなったか。宝建徳はこれを迎えて皇后とし、みづから夏王を称した。

宝建徳は河北貝州内身の農民で、貧窮に苦しむ叛乱農民のリーダーとなった。仁政を第一義として部下たちの信頼も篤かった。ところが蕭皇后を迎えるやその性格ががらり一変する。賢臣を遠ざけ、俄かに貪慾となり。我執を押し通すのである。凡庸な権力者へと下落していった。

そのころ西方長安に王世民——後の唐太宗の軍が強大になりつつあった。また北方からは異族の突厥が侵攻をくり返している。宝建徳は両面作戦と強いられることになった。

苦しまぎれに宝建徳は掌中の珠、蕭皇后を突厥王へ与えてしまう。

だが、これも偽瞞の策で、蕭皇后のあとを大軍が追尾し、和義の席上へなだれこんで突厥王を殺したのである。運命にはさからわず、流転に身をゆだねてきた蕭皇后も今度ば

かりは宝建徳のもとへ戻らなかった。隋の煬帝との間でもうけた娘二人と山西の太原に隠棲した。

宝建徳は、突厥王を殺した勢いで王世民の唐軍に決戦を挑む。しかし王世民は稀代の戦さ上手であった。宝建徳軍有利とみられた数最上のハンデを逆転して、洛陽の東、武牢関の決戦でこれを潰滅させた。宝建徳は長安の広場で処刑された。

華北を平定しつくした王世民は唐の太宗を名乗って長安に政權を樹立した。ただちにやったのは太原の寓居から蕭皇后母子を招き寄せることであった。皇女二人を後宮へ入れた。やがて皇女らは太宗の第三皇子吳王、第六皇子蜀王、とそれぞれの母后となった。蕭皇后は太后として長安城内に、ようやく長かった流転の春秋を安息の晩年で結ぶことができたのである。

健康城（南京）の獄房で「蜜を、蜜を……」と求めつつ死んでいった梁武帝に「観無

量寿経」における老帝頻婆娑羅王の姿が覗き見られるとしたら、この蕭皇后の足跡に韋提希夫人の悲しい横顔が感じられないであらうか。

後年の善導がその「観無量寿経」に理智と情念の限りを傾けつくし、純度の高い信仰にまで深めた精神上の土壤としてこの梁王朝を結びつけるのは飛躍にすぎるのであらうか。まさしく善導教学には、脈々と情感の奔流がつかぬくのを特色としている。理智の堆積だけでは汲み出せないものがある。

隋の煬帝が蕭皇后を迎えたときに発した詔勅「荆楚ノ地ニ跼蹐シ」の「楚ノ地」を生地とした善導。その生家は梁朝の遺臣だったのではあるまいか、という推定は、彼が晩年をすごした漢水の襄陽とも符合してくる。

襄陽が梁武帝発祥の地だったことは、すでに触れた。軍事行動の蹴起だけではなく、この仏都に深々と根をおろした仏法こそ、溺仏帝とまで言われた梁王の宗教政治の基幹とな

った。

慧遠法師は十八年滞留した。曇鸞大師もいた。梁武帝も……晩年の善導がこの地で念仏生涯の完成を求めたことはきわめて自然であらう。

さらに生地泗州には寡少と言われた俗姓の朱氏も梁武帝側近の大官朱异を筆頭に遺臣に朱姓は甚だ多い。在地固有姓には寡少であっても流亡民まで「そうだった」とは言いきれまい。

梁朝の遺臣、朱氏の一族。泗州に生まれて七歳で出家した、と推定できるのではあるまいか。しかしこれはあくまでも文学的な想像であって、定説とはなり難い。

文学では、あくまでも生々しい人間像の把握が問題であって、その造影から事蹟に遺るさまざまな行動、業態が再構成されてくるのである。

七歳で密州の明勝法師のもとで剃度したかどうかは不明にしても、「瑞応刪伝」が総括

する「少シテ出家」は間違いないところであらう。

当時の常識で幼年者の出家はやはり中産階級以上に考えねばならない。読み書きの可能が条件となるからである。梁朝の遺臣とした根拠の一つもこうした家柄を勘考したからである。

満々たる水量をたたえた旧泗水の通齊渠が、泗州城下で淮河と合流する。ひとたび豪雨が降り続けば、濁流牙を剥く猛威と化したはずである。さらにこの水路は南方肝胎の湖群へとひろがってゆく。

まさに水また水の茫洋たる世界を幼時に眺めて育った善導が、その水脈をかき分けてひと筋の道を探がし出そうとした求法姿勢もうなずけてくるであらう。この生地環境があつてこそだ。

水脈をかき分けたひと筋の細い道が宗教思想へと結晶したとき、それが「二河白道」なのであった。

正しい人間の進む道は、これ一本しかない。阿弥陀仏がいます西方の国へつらなる唯一とすじの道。

左右へ踏み外せば火焰や濁流に吞みこまれてしまふ、背後からは猛獣の群れが牙を鳴らして追ってくる。幸わい、道幅が余りにも狭隘なために猛獣どもも立ちどまつてしまった。

あと戻りは許されない。足もとを乱してもいけない。急がず、あわてふためかず、ひたむきに直進するこの二河白道――。

すでに康熙十八年に湖底へ沈んでしまった泗州水邑の景に、われわれは善導の二河白道を想起すべきであらう。さらには泗州城内に実在したと言われる香積寺の伽藍を、終南山神和原に現存する善導墓塔にしのぶべきであらう。

江南の残月が、天上からそのように語りかけてくるにちがいない。

◎読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
（とめ下さい）

一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十一巻 五月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十年四月二十五日 印刷

昭和六十年五月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二八七番

(新)

(刊)

南無阿弥陀仏

『極楽浄土を想い観る』

浄土教聖典 観無量寿経を読む

定価 一二〇〇円

〒二五〇円

著者

大正大学名誉教授・文博

竹 中 信 常

父の殺害を企て母を牢獄に幽閉する非道の王子阿闍世アジャセ。絶望と悲歎の底から救いを求める母韋提希夫人イダイマ。その壮絶な人間ドラマを背景に展開される極楽浄土とは……。悩み、悲しみ、迷う現代人に贈る阿弥陀如来の世界がここにある。

山手書房

〒112 東京都文京区後楽二―二―一〇松屋ビル
電話 〇三(八一五)七四八六(代) 振替 東京七―五四〇一八

第五十一卷

五月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十年四月二十五日印刷 昭和六十年五月一日発行